



TITLE:

東南アジア近代における文化の自画像の形成

AUTHOR(S):

清水, 展; 関本, 照夫; 内堀, 基光

CITATION:

清水, 展 ...[et al]. 東南アジア近代における文化の自画像の形成. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 1: 82-87

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187405>

RIGHT:

東南アジア近代における 文化の自画像の形成

1. 研究組織

研究代表者：清水 展（九州大学教養部・助教授）

研究分担者：関本 照夫（東京大学東洋文化研究所・教授）

内堀 基光（一橋大学社会学部・教授）

2. 研究のねらい・目的

本研究は、計画研究「外文明と内世界」に関連する公募研究である。研究のねらいは、外文明／勢力の植民支配のもとで、内世界にナショナリズムを生み出し、「祖国」の解放と独立の運動を導いてゆくような民族意識あるいは国民意識が、いかに生成し、展開されたかを明らかにしようとする点にある。とりわけ、そうした民族／国民意識の覚醒が促され進展する際に、その自明の根拠となって民族／国民の誇りとそれへの共属意識をはぐくむと同時に、逆に、民族／国民意識によって、かけがえのない至高のものとして称揚される「民族固有の文化」あるいは「国民文化」という観念が、いかに形成されたかを研究する。

伝播論的な文化論・文明論では、外来の文明と固有の文化という対比がしばしば行われる。両者が反応を起こして新たな文化が発展したり、外来文明の被膜の下に固有の文化が潜んでいたりという比喻で、両者の相互作用が語られる。そこでは、文化の個々の要素やパターンが客観的実在、物のようなものとしてあつかわれる。この語法では文化は観察によって見出されるものということになり、客観的実在としての文化を見つけ出して語るのが研究者の仕事ということになる。

これにたいし文化とは物のような実在というより語りである、あるいは語り・言説としてしか実在していないと考えることができる。もしも文化という概念が純粹に学問上の術語であり、学者の共同体のみが文化を客観的に対象化して語るだけのことなら、事態は単純明快である。だが現実には文化は日常用語であり、さまざまな社会に自分たちの文化についてのさまざまな語りが満ち満ちている。研究者の側から、客観的な構えをとって、「ジャワの文化はこれこれのものである」「タイの文化はこれこれのものである」と議論を重ねる前に、それぞれの社会でみずからの文化なるものがどのように語られてきたか、語られているかを、事実在即して検討することができるはずである。

ここで重要なのは、文化という概念が西欧近代に生まれた新しい概念であり、国民の概念などと同じように世界に広がり普遍化していった近代世界固有の概念だということである。文化という概念や言葉の使用、あるいは文化に着目し、文化を語るということ自体は新しい現象で

あり、19世紀以降のことなのである。

しかもそのような文化をめぐる言説の出現は、民族／国民・国家の創出と不可分の関係にあり、「文化を語る」ことについて論ずることなしには、民族／国民や国家の形成について十分な検討を加えることはできない。言い換えれば、文化という概念をもちいて「われわれ」や「彼ら」について語りあうという、近代世界の普遍的制度を通じて、諸共同体がみずからを形成するという過程に、われわれは外文明と内世界、あるいは世界的制度と局所的単位との相互作用の現代的な現れを見ることができる。

そして外文明による植民支配という枠組みを与えられた東南アジア世界においても、外文明から影響を受けた小説、評論、評伝などの文化を語るという言説の制度そのものによって「民族／国民」や「文化」は新たに見い出され、その内容が充填されていったのである。したがって、近代の東南アジア諸社会において文化という概念がどのように導入され定着し、それを用いてさまざまな政治的共同体がどのような自己像を作り上げていったかという問題を、限定された経験的問いとして立てうるわけである。本研究は、こうした視点から、外文明と内世界の対抗関係、および「民族・国家」と「文化」の相互反照的な内実形成の過程を分析しながら、国民国家形成の一様式を明らかにすることを目指す。

文化は、まさに文化人類学の中心的研究テーマであり、文化の側から民族／国民や国家について語るにより、新たな展望が開かれることが期待できる。また、従来の文化人類学が、小規模な社会で蓄積してきた文化研究を、国民レベルの問題へと応用することは、文化人類学の発展にも寄与するものである。

3. 平成5年度の研究経過

第1回研究会：7月10日（土） 東京大学教養学部

研究班としての共通の問題意識の確認、および各自の具体的な研究テーマと展望についての意見交換など。

第2回研究会：11月6日（土） 京大会館

関本照夫「若い国民社会における文化の語り方」

文化の概念の普及と文化を語る制度の普遍化がインドネシアの場合にどのように進展してきたかを検討する。具体的な事例としてワヤンの語られ方を取りあげ、それが政治共同体を形成し強固なものとする凝集力のひとつとなってきたことを明らかにする。

田村克巳（国立民族学博物館教授）「ビルマにおける国民文化のゆくえ」

現在のビルマの政治的な閉塞状況は、政権側と民主化勢力の側が、いずれも過去の負の遺産と伝統の呪縛にとらわれていることにある。一方は空虚なナショナリズム「ビルマ人のビルマ」の枠をかたくなに押しつけ、他方は新しい政治言説の回路をもつことなく、あまりに素朴に伝統的なものを取り込み（取り込まれ）、依拠している。

第3回研究会：12月22日（水）～23日（木） 福岡リーセント・ホテル（原班、足立班と共催）

内堀基光「国民・文化の大枠・中枠・小枠：マレーシア連邦・サラワク州・イバン社会」

サラワクのイバン社会からマレーシアの国家統合を考える。マレーシアの政治共同体は、地域コミュニティ（イバン）、州（サラワク）、国家（連邦）の3層のレベルに分かれ、それぞれが固有の意味世界を構成している。一般問題として、国家における個別文化の枠組をどこにとりうるのか？大中小より細分化、多元化した枠が必要か？問題を提起する。富山一郎（足立班）「ミクロネシアの『日本人』：ナショナル・アイデンティティの非決定性」

原 洋之介（原班）「地域研究への疎遠性を内在する経済学小世界」

第4回研究会：2月10日（木） 東京大学東洋文化研究所

清水 展「映画アリワン・パラダイス：フィリピン文化の自画像」

アセアン・オムニバス映画「サザンウィンズ」のなかのフィリピン篇「アリワン・パラダイス」を事例として、フィリピンに固有な自文化の語り方を検討する。自生、内発的な大伝統や高文明を称揚したり、それへのノスタルジックな回帰のなかに文化の自画像を求めるのではなく、近過去を茶化したりずらしたりすることをおして現在が定位されることを明らかにする。

落合一泰（茨城大学助教授）「ラテンアメリカのヴィジュアルイゼーション：地域文化の性差の発現」

新大陸の発見以降、ヨーロッパがアメリカを一貫して女性として表象し続けてきたことを、豊富なスライド資料によって明らかにする。女性として描かれる新大陸は、男性であるヨーロッパによって、救済されるべきもの、あるいは征服し支配されるべきものとして意味づけられてきた。政治的な支配非支配の関係が男女の性差で表象されることの含意を多面的に検討する。

4. 研究の成果、フロンティアと今後の課題

清水 展

フィリピン社会・文化の特質については、民族の矜持として回帰するような栄耀栄華を誇った王国や高文明がなく、植民支配下の解放闘争がいつも未完のまま挫折し、自前の国家を近年まで持てず、独立は恩恵的に与えられ、その後の国家建設においては官僚制の整備が進まないことなどが指摘される。すべては、国民国家の幻想が弱いこと、統合の度合いが低いことと結び付けて語られる。

フィリピン人であることの誇りや自覚は、過去の大伝統へのノスタルジックな回帰や、自生内発的な文化の称揚によってではなく、スペインやアメリカの植民支配、そして戦後はアメリカの新植民地主義に対抗する言挙げの中ではぐくまれてきた。

今年度の研究によって、フィリピンにおける文化の自画像は、固有の大伝統を持たない「空虚な過去」の神話化の試みのなかにではなく、「未完の革命」の帰結としての現状を常に批判し、相対化し、さらには、より良い本当の在るべきフィリピンの実現を夢想する語りのなかに、あるいは未来への投企の物語として描かれているとの見通しを得た。

さらにフィリピン文化の特質は、外来の様々な文化要素の流入、混融としてあるといえる。言い換えれば、「元は外なる内たち」と「やがて内になる外たち」との接触、摩擦という臨界面の生成、浮遊、変転、揺れ動きとしてあり、これからもそう在り続けるであろう。歴史を遡る大伝統のなかにではなく、内と外のはざまにこそ、一貫してフィリピン的なリアリティーがある。

今後の課題としては、ボーダーレス化やクレオール化という面では、日本や他の東南アジアの国々よりも一歩も二歩も先んじている先進国としてフィリピンを捉えなおし、そのハロハロ・クレオールの文化を語る彼らの語り口を詳細に検討してゆく必要がある。

関本照夫

インドネシアの知識層のあいだでオランダ語の *cultuur* が普及し、やがて *kebudayaan* という翻訳語に置き換えられ、自分たちの文化について書き語ることが当たり前になるのは、20世紀のことである。

今年度の予備的作業では、インドネシアについて、影絵芝居をめぐる19世紀末以来の諸言説や、戦前の文化団体ジャワ研究所の機関誌に現れた言説を検討し、今日のインドネシア国家の「民族の文化」をめぐる語りの基本的原型が、この時期にすでにでき上がっていることを確認した。さらにさまざまな文化の語りを検討し、インドネシア近代の歴史的文脈に位置づけてい

くのが、今後の課題である。一方、研究班の議論の中では、文化の語りの国民的制度化という現象が、他の東南アジア諸国にも確認できるものの、その社会的浸透の度合いには、国ごとに大きな違いのあることも指摘され、今後の比較作業が必要である。また、第二次大戦後＝独立後の国家、国民社会において、国民の文化、地方の諸文化をめぐる言説がどのような変遷を遂げてきたか、それが総体としてどのような効果を帯びてきたかという点も、来年度以降の課題である。

内堀基光

今年度は科研費（国際学術研究）によるマレーシアおよびブルネイにおける調査に2か月あまり（8月23日から11月3日まで）でかけたため、国内での研究に関して幾分支障をきたしたことは否めない。この国外調査を含め、基本的にはボルネオ島西部におけるイバン社会の近年の変容過程を追及し、そのなかからイバン系住民がその一部を構成するマレーシアとブルネイの国家体制および国民文化のあり方を探ろうとしてきた。とりわけマレーシア連邦の一州をなすサラワク州の文化的多元性とマレーシアという国家によるマレー文化振興政策との軋轢については12月の班研究会で発表した。

班研究会での発表において、国民文化とは称しても、連邦制国家と集権的国家ではその様態が大きく異なることを明らかにした。今年度中の成果の発表としては、このほか、5月にハワイで行われた米国社会科学研究協議会主催による「東南アジアにおける文化的市民権」（Cultural Citizenship in Southeast Asia）に関する研究集会において、イバンの文化の位置づけが、マレーシア連邦の文脈で語る場合と、サラワク州の文脈で語る場合とでは相反するものがあることを指摘し、国民文化を単層で語るのではなく、地域によっては重層的なものとして語る必要があることを明らかにした。

今後の課題としては、まず来年度にボルネオ島という地域の外部世界に対する開かれ方をできるだけ過去に遡って探究するつもりである。伝統的な人類学の言説では、ボルネオの諸社会はかなり孤立的なものとして語られてきた。これに対する反動として、歴史学的な言説、あるいは歴史的な観点をとりいれた社会学、人類学の最近の言説では、これらの社会を東南アジアという枠組み内での交易・交渉のネットワークとの関連で見るという傾向が顕著である。この二つの極のあいだの距離を計ろうというのが今後の課題である。

班研究との関連でいえば、国民文化以前の、ボルネオという地域文化の特性をこれによって、より堅固に同定することが、3つの国民国家にまたがるこの地域を論じるためには必要と思われるからである。

5. 研究業績（平成5年度発表分）

清水 展

「法廷に立つ大統領：法治の建て前をめぐって」宮本勝・寺田勇文編『フィリピン読本』河出書房新社, pp. 210-216, 1994.

「ピナトゥボ大噴火とアエタ民族の危機：運動の言説をめぐる内省」『九州人類学会報』No. 21 : 1-20, 1994.

「映画『アリワン・パラダイス』：フィリピン文化の自画像」『総合的地域研究』No. 4 : 19-25, 1994.

「性差：男らしさと女らしさについて」浜本満・浜本まり子編『文化人類学のコンセンサス』学術図書出版社, 1994.

関本照夫

「スリナム・ジャワ人調査ノート」前山隆編『アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合：民族集団間の協調と相克に関する研究（中間報告）』静岡大学人文学部文化人類学教室, pp. 5-12, 1993.

「文化概念と近代世界」『本』1994年3月号.

『国民文化の生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』（船曳建夫と共編著）リプロポート, 1994.